

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

保健医療学部
リハビリテーション学科作業療法学専攻

増田 雄亮

(2023年9月29日作成)

1. 教育の責任

本資料作成者である増田雄亮（以下、作成者）は、保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の教員として、以下の授業科目を担当している（見学実習・地域リハビリテーション実習・評価実習・臨床総合臨床実習は割愛）。各授業のシラバスは、湘南医療大学WEBポータルサイト上で本学学生並びに教職員に公開されている。

| 科目名 | 開講 | 必修・選択 | 受講者数 | 単位数 |
|-------------------------------|------|-------|-------|-----|
| 運動学II (作業療法学専攻) | 2年後期 | 必修 | 30～40 | 1 |
| 運動学演習(応用) (作業療法学専攻) | 3年前期 | 必修 | 30～40 | 1 |
| 身体障害作業療法学III(応用) (作業療法学専攻) | 3年後期 | 必修 | 30～40 | 1 |
| 高次脳障害学 (理学療法学専攻) | 3年前期 | 必修 | 30～40 | 1 |
| 生活支援機器論 (理学療法・作業療法学専攻) | 3年前期 | 選択 | 40～50 | 1 |

作業療法学専攻の専門科目として「運動学II」「運動学演習(応用)」「身体障害作業療法学III(応用)」を担当している。「運動学II」「運動学演習(応用)」は、解剖学・生理学と並ぶ基礎医学である運動学に関する講義・演習科目であり、国家試験対策として非常に重要な位置づけにある科目と認識している。そのため、授業内では国家試験問題を解くための知識を教授するとともに、国家試験問題を提示して学生に解いてもらう機会を積極的に取り入れている。「身体障害作業療法学III(応用)」は、3年次「評価実習」、4年次「総合臨床実習」前の科目配置であることから、作業療法臨床の流れを強く意識した授業展開として、事例を提示して学生自らが能動的に問題解決を行う形式を採用している。

理学療法学専攻の専門科目として「高次脳障害学」を担当している。脳卒中リハビリテーション分野における理学療法の重要な背景理論として運動学習理論がある。脳卒中後に残存する高次脳機能障害が運動学習の阻害要因となることも多いことから、運動学習を効率的・効果的に支援するために高次脳機能障害を理解することが重要であることを強調し、臨床と関連付けながら授業を構成している。神経心理学的検査の演習を積極的に取り入れ、その解釈の方法についても教授するようにしている。また、理学療法士国家試験の問題も授業内で紹介し、実際に解いてもらうことで授業の理解度を高める工夫をしている。

作業療法学専攻・理学療法学専攻の共通科目として、「生活支援機器論」を担当している。昨今の急速なテクノロジーの発展を背景として、テクノロジーを応用した生活支援機器について学生自らが調べ、考え、まとめ、発表する形で授業を構成している。選択科目であることも鑑み、なるべく学生が興味あることを探求し、近年のテクノロジーの発展とリハビリテーションへの応用に興味を持てるように工夫している。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

「作業に焦点を当てた実践」を基盤として、「エビデンスに基づく実践」の方法論を理解し、臨床実習を通して作業療法学と基礎医学（解剖学・生理学・運動学）の統合が行えることを学生に期待している。これを実現するために、「運動学II」「運動学演習（応用）」では、解剖学・生理学と関連付けた講義を展開し、作業療法学への応用を教授している。「身体障害作業療法学III（応用）」では、「作業に焦点を当てた実践」と「エビデンスに基づく実践」に関する知識と技術を身に付けてもらえるように、コミュニケーション演習・問題解決型学習などを積極的に取り入れている。作成者は、回復期リハビリテーションと生活期リハビリテーションの現場において作業療法士として臨床経験を重ね、研究も同領域のものが多く、これらの臨床と研究を直接教育に還元できている点が作成者の特徴的な点である。

2) 理念をもつに至った背景

特に身体障害分野における作業療法士は、その歴史的背景から、専門職としての同一性（アイデンティティ）を確立できない時代が存在した。作業療法士のアイデンティティが比較的確立し、作業行動理論が教育的に普及するようになったのは2010年以降である。近年では、「作業に焦点を当てた実践」として普及しているが、この概念を獲得するためには、卒前・卒後教育の中で一貫して「作業」と「作業に焦点を当てた実践」について学生自身が理解を深める必要がある。これらを深く理解できることが、クライアントに作業療法士として専門的な視点を持って対峙するために必要不可欠であると考えている。

一方、上記のみでは臨床家として不十分である。病院で働くためには、基礎医学・臨床医学と作業療法学との統合が欠かせない。また、臨床疫学から派生した「エビデンスに基づく実践」について理解し、エビデンスをクライアントに適応するプロセスを実行できる知識と技術を学生に身に付けてもらう必要がある。これは、作業療法学が科学の一分野であると同時に、作業療法士が科学的根拠に基づいたセラピーを実施していることを伝えていくために大変重要であると考えている。「作業に基づいた実践」「エビデンスに基づく実践」に加え、基礎医学・臨床医学・作業療法学を統合できることで、作業療法士はチーム医療の一翼を担う存在として機能するものと考えている。

3. 教育の方法・戦略

【概要】

作成者は、上述の教育理念を達成するために、担当科目毎に到達目標に応じてさまざまな教育方法を適応している。「運動学II」「運動学演習（応用）」では、国家試験を念頭に入れた知識を定着してもらうために、定期的な小テスト実施や **Team-Based Learning** を積極的に採用している。「身体障害作業療法学III（応用）」では、「作業に焦点を当てた実践」と「エビデンスに基づく実践」の統合、基礎医学・臨床医学・作業療法学との統合を目指して、個人学習・グループ学習・**Problem-Based Learning**などを積極的に採用している。

【方針】

作成者が担当する授業科目では、学生が主体的かつ能動的に取り組めるような教育方法を導入している。基礎医学系の科目である「運動学II」「運動学演習（応用）」では、国家試

験を意識した知識定着を図るための授業に加え、臨床運動学の視点からクライアントの動作を分析する力を養うような授業を展開している。「身体障害作業療法学Ⅲ（応用）」では、「作業に焦点を当てた実践」と「エビデンスに基づく実践」の深い理解と、基礎医学との統合を目指して、事例検討を中心とした臨床的な能力を培うことを主眼とした教育方法を展開している。

【方法】

- 小テストの実施
国家試験対策として役立つ知識の定着を目的として、毎回小テストを実施している。前回の講義内容を学生に復習してもらおうと同時に、授業に対する前向きな姿勢を促進する意図も含んでいる。小テストは、Google Forms で作成し、学生のスマホから回答可能な形としている。
- Team-Based Learning (TBL)
上記、小テストを個人で受験した後、グループで議論してグループ回答を作成し、同様に Google Form へ回答してもらっている。自動採点でフィードバックされるように設定しているため、グループ回答の正誤がすぐに分かり、モチベーションにも繋がると考えてこの手法を採用している。
- Problem-Based Learning (PBL)
身体障害作業療法分野における脳卒中事例をペーパーペイシェントとして学生に提示し、評価→統合と解釈→目標設定→プログラム立案までの流れをグループメンバーで協力しながら取り組んでもらっている。自ら考え、調べ、協力し、教員に指導を求め、という能動的な学習を展開できる点が利点と考えてこの方法を採用している。

4. 学習成果

- 令和4年度授業評価アンケート結果「運動学Ⅱ」
コミュニケーション・板書・総合平均は4.3点以上であり、学科・学部平均を上回った。意欲・環境平均は、学科・学部平均と同等であった。一方、理解・向上・自発的・探求・熱意・教え方平均は4.0～4.4点であり、学科・学部平均をやや下回った。2021年度と比較すると、意欲 4.1→4.4 理解 4.0→4.0 向上 4.1→4.2 自発的 4.1→4.0 探求 4.0→4.0 熱意 4.1→4.4 教え方 4.2→4.2 コミュニケーション 4.2→4.3 板書 4.0→4.4 環境 4.0→4.5 総合 4.1→4.4 という結果であり、意欲・理解・向上・自発的・探求・教え方・コミュニケーションは相違なかったが、板書・環境・総合は0.3程度の向上を認めた。
- 令和4年度授業評価アンケート結果「運動学演習（応用）」
5段階得点においては、設問7を除くすべての項目において、看護学科・理学療法学専攻・作業療法学専攻の平均値を上回っており、学生にとって概ね良好な授業展開が行えたものと思われる。設問7「教員の熱意」では、担当者4.48点（看護学科4.50、理学療法学専攻4.57、作業療法学専攻4.53）であり、学科間・専攻間と比較して平均値にわずかながら及ばない結果であった。「この授業で良かったと思う点」に関する自由記述欄には「小テストがある点」との記載があった。授業前半部分で解剖学・運動学の授業を行い、これを小テストとして提示したことで学生にとって2年次までの復習の機会を提供できたものと考えている。

- 令和4年度授業評価アンケート結果「身体障害作業療法学Ⅲ（応用）」
意欲・理解・向上・自発的・探求・熱意・コミュニケーション・板書・総合平均は、すべての項目で4.3点以上であり、学科・学部平均を上回った。一方、教え方と環境平均は若干ながら学科・学年平均を下回った。2021年度との比較では、いずれの項目も誤差程度の違いであった。授業で良かったと思う点については、「ICFに則ったアセスメント表の作成、統合と解釈、問題の焦点化、プログラム計画立案といった一連の流れを1から自分たちで取り組むことができ良かった」「これまでの講義では、このような取り組みがあまりなかったため、もっと取り入れるべきだと思った」「説明が端的で分かりやすい」「重要どころが分かりやすかったし、グループワークを通して学ぶ力がついた」「事例検討をあまりやることがなかったので、実習前に経験できてよかった」「グループワークでの事例検討をおこなったことで自分の考えだけでなく他の人の考え方も知れてとても良かった」という記載があった。

5. 改善のための努力

- 「運動学Ⅱ」
座学中心の講義となるため、学生の能動的な学習を促す工夫が必要である。引き続き、小テストやTBLを導入するとともに、その制度を高めていきたい。具体的には、小テストの問題形式を選択式ではなく、間違いを修正する形に変えるなどして、より深い理解を促していく方法が考えられる。
- 「運動学演習（応用）」
筋骨格系の復習として、解剖学関連の復習と小テストを行ってきたが、知識定着の不十分さや作業療法学との関連性が十分に伝わっていないことが課題と考えている。グループ学習で調べ学習を学生に運がしつつ、臨床での活用方法をわかりやすく伝えていく努力をしたい。
- 「身体障害作業療法学Ⅲ（応用）」
これまで学んできた身体障害作業療法関連の統合を目指しているため、内容が過多になってしまう傾向がある。授業構成と効率的な教育方法を一層充実させていく必要性を感じている。

6. 今後の目標

【長期目標】

- 担当科目全てにおいて、国家試験・臨床実習と密接にリンクさせた教育が行える。
- 学生が能動的に授業に参加できるように、多様な教育方法と教育評価を組み合わせることで授業を展開できる。

【短期目標（令和6年4月）】

- 授業評価に診断的・形成的評価を取り入れる。
- 小テスト・TBL・PBLの精度を高め、国家試験・臨床実習にリンクさせた教育が展開できる。
- 90分の授業を効率的に展開できるように、アクティブラーニングの教育方法を復習し、担当科目に1つずつ導入できる。